



真宗大谷派
東京教区

年祝いのお参り

の手引き

発行
真宗大谷派
東京教区 教化委員会 広報出版部門
〒177-0032 東京都練馬区谷原 1-3-7
TEL : 03-5393-0810 FAX:03-5393-0814
mail : tokyo@higashihonganji.or.jp

はじめに

私たちの人生には様々な節目があります。その節目を「いのち」の節目として、南無阿彌陀仏の教えに出遇う勝縁としていただくことを願い、このたびシリーズ『人生の節目にお寺がある』第二弾において、「年祝い」をテーマにリーフレットを作成いたしました。また御寺院で執行される際の参考として併せて本手引きをお作りいたしました。

「人生100年時代」と言われる昨今。「年祝い」は長寿を祝う行事として一般的になっていきます。その反面、長寿だからこそ感じる苦しみや悲しみがあるのではないのでしょうか。

「年祝い」を縁にお寺にお参りすることを通して、「年祝い」を迎える本人のみならず、その家族、また縁ある人たちと共に南無阿彌陀仏の教えに出遇い、「人と生まれたことの意味をたずねる」大切な仏縁にしていきたいと願っております。

「年祝い」は、例えばご本人の誕生日や敬老の日、また新年の修正会といったお寺の集まり、あるいは結婚記念日などに合わせて行うのもよいでしょう。

また「年祝い」をご縁に「帰敬式」を奨励されてはいかがでしょうか？

どうぞリーフレットならびに手引きをご活用いただき、ご縁ある方と共に聞法求道の道を歩まれることを願っております。

れているのではないのでしょうか。

平穏な日々だけではなかったかもしれませんが、阿彌陀さまとご縁をいただいたこの場所を大切にして、これからも阿彌陀さまの呼び声を聞くこと（聞法）と、そして南無阿彌陀仏を称える（称名念仏）生活を切に願い、お祝いの言葉とします。

今日は、ようこそ皆様でお参りくださいます、大変ありがとございました。

〈お祝いの言葉④〉

そもそも長寿をお祝いようになったのは、奈良時代に貴族の間で始まり、その風習が一般民衆に広まったのは室町時代から江戸時代だと考えられています。

年祝いというと、「還暦（満六十歳）」、「古希（七十歳）」、「喜寿（七十七歳）」、「傘寿（八十歳）」、「米寿（八十八歳）」、「卒寿（九十歳）」、「白寿（九十九歳）」、「百寿（百歳）」など、長寿の節目として、感謝の気持ちと、いつまでも長生きしてほしいことを願うお祝いとして定着しています。年を重ね、今日まで生きてこられたことは、多くの方々の支えがあってこそこのことであり、本当にありがたいこと

です。その反面、これまでできたことができなくなったり、病気が見つかったり、自分の思い通りにならないことがあることを、実際に自分の身をもって感じるようになってきたのではないのでしょうか。

自分の思い通りにならない老いや病、そして死の前では、これまで蓄えてきた知識や経験、そしてお金や地位や名誉は役に立たないのです。自分の身に起こった事実を通して、これまで頼りとしてきたものが、本当は頼りにならないものを頼りとしてきたことに気づかされるのです。

「私たちは、生きることなく、ただ、生きる準備ばかりしている」（ブレース・パスカル、フランスの哲学者）という言葉があります。

この世に誕生し、生きるということは、どういうことなのでしょう？ 本日のご縁を機会に、人として生まれてきたことを、老・病・死する我が身を通して本当に受け止められているのかということを問い直す歩みを始めていただければと思います。

短い時間ではありませんでしたが、お祝いの言葉とさせていただきます。本日は、お参りいただき、ありがとうございます。そして、あらためて新たな人生のスタートにお祝い申しあげます。

り、このお参りが宗祖の教えを確かめる大事な機縁となり、これからますます本願念仏の教えを歩まれますことを願っております。

本日は本当におめでとすごございました。

〈お祝いの言葉②〉

本日は○○○○さんの○○(還暦等)の年祝いのお参りで勤めいたしました。誠にめでとございます。仏事として年祝いでお寺にお参りすることは、○○○○さんの○○(還暦等)をご縁にして、ご家族が南無阿弥陀仏のおいわれを聴聞し、自らの人生を振り返る事が出来る重要な機縁であると思うのです。

私たちは自分の人生を自分の思い通りに生きていきたいという思いが止めどなく湧いてきます。しかし現実には、自分の思い通りの楽しみや喜びばかりではなく、苦しみや悲しみも多いものです。そしてそれを抱えながら歩む事は難しいことです。若さや健康をどれだけ望んでもそれが叶わないこともあります。若さや健康だけが人生でないことを、私たちはどこかで感じ取っていきましょう。年を重ねてきたからこそ知れるこの身の事実に出会うことがあります。

装束と荘厳

装束と荘厳については、『初参り式の手引き』(2022年4月配布)の「装束と荘厳」(p3)に準じますのでご参照願います。

※『初参り式の手引き』は「初参り式手引書」で検索か、または次のQRコードより閲覧・ダウンロードが出来ます。



年祝いのお参り 式次第

式次第についても、前出の『初参り式の手引き』の「初参り式 式次第(例)」(p4)に準じますのでご参照願います(ただし右記式次第中、「誕生児念珠授与」は初参り式に限るもので、年祝いのお参りでは行いません)。

この身を通して、この身とともに歩んで行く事が出来る道があります。どうか、親鸞聖人の教えを通して人生に会い直す機縁となることを念じております。

〈お祝いの言葉③〉

本日は○○さん○○歳となり、年祝いにあたり、お参りいただきありがとうございます。

お寺での年祝いは、私たちがこの世に生まれ、年を重ねてきた中で、有縁の方々の慈愛に育てられてきたことを確認し、遇い難き仏法僧に遇い得た喜びとともに、これから人生をどのように過ごしていくのかを、たずねていくという意味があります。

いのちそのものは、遠く過去から、はるか未来への繋がりの中にあります。その中でありながら、私たちは自我に埋没し、煩惱のただ中であって、その繋がりを忘れて生きております。

思い通りになることも、思い通りにならないこともあるわけですが、いま現在このようにある私のいのちの事実、年を重ねてきたからこそ知れることもあります。そのことを通して、人生に丁寧に向き合って生きることが願わ

表白(例)

表白 例①

本日ここに ○○○○殿の○○(還暦等)を迎えるにあたり有縁の同朋あい集い 謹んで尊前を荘厳し 懇ろに聖教を誦誦しこの法縁を祝す

憶うに人身を受くるは極めて稀なり
然うして(それに加え)人の世は荒波の航海のごとくなり
宗祖親鸞聖人は 人生を「難度海」にたとえられけり
そもそも積尊に始まり七高僧を経て
宗祖親鸞聖人に伝えられし本願念仏の教えに遇うことは
あたかも大海のとまり木にたどり着くかのごとき奇跡なり

数限りなき有縁に恵まれ この記念すべき日を迎えしことは
まことに弥陀の本願に照らされし上のことなり
しかれどもこれを以て 人生の大成にはあらず
教えをたずぬる道に終わりなく いままさに新たな航海の機縁といえり

まさに願わくはこの法縁に遇いて いよいよ深く真実のみ教えに
遇い 本願念仏の道を歩まんことを願わん

○○○○年 ○○月 ○○日
○○寺住職 釈○○ 敬って申す

表白 例②

敬って大慈大悲の阿弥陀如来の御前
ならびに浄土真宗の宗祖親鸞聖人に白して申さく
本日ここに恭しく尊前と祖師前を荘厳し 有縁参集のもと ご家族と共に
○○○○さんの○○(還暦等)の年祝いを修したてまつる

それおもんみれば

○○○○さんは ○○○○年○○月○○日に○○○○の地に生を享け
○○(お連れ合い)さんと出逢い結婚の志を立て ○○○(お子さん)さん
を授かる

それよりこのかた 日々の生活のただ中であって 苦楽ありとも 家族一
同手を取り合い 共に語り共に過ごす

また縁あつて数多くの人々に出会い 互いに支え合い 本日にいたる

宗祖親鸞聖人 和讃にいわく

生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける と

まことにこれ生死の苦海の中において大慈大悲のお育てにあい

御年○○歳まで人生を重ねらるる 今日より後 さらに家族あいたずさえ

て 如来大悲の恩徳を仰ぎつつ 宗祖親鸞聖人の教法を聞思し 人生荘嚴

のまことを尽くさんことを

○○○○年 ○○○月 ○○○日

○○寺住職 釋○○ 敬って申す

表白 例③

本日ここに○○さん○○歳となり
○○(還暦等)を迎えるにあたり

阿弥陀如来様の尊前で御祝いの法会を営みます

お釈迦さまは この世に常なるものではなく

日々刻々に移り変わると説かれました

そして 蓮如さまは 御文で人のいのちを

朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり

と示されます

その理のとおり

次第に耳目の衰えなどの中にあいつつも

○○歳の年を迎えられしこと

まことに不可思議なご縁であります

今までの有縁の厚情におもいを致し

念仏の教えとの縁を

いよいよ大切に過さんことを

○○○○年 ○○○月 ○○○日

○○寺住職 釈○○ 敬って申し上げます

お祝いの言葉

〈お祝いの言葉①〉

本日は○○さんの○○(還暦等)をお迎えなされるにあたつ
て法要をお勤めできましたこと、大変おめでとうございます。
今日はとてもお天気も良く、お祝いにふさわしい日とな

り喜ばしく思います。

(今日はあいにくの雨模様となりました。人生晴れの日は
かりではなく雨の日もあり、それはそれでこれまでの歩み
をじっくり振り返るかけがえのない時間といえましょう。)

これまでの人生を振り返えられるとき、それはまるで大海
原の航海のようなもので、決して穏やかな海だけでなく、時
に荒波に揉まれて沈みかけたこともあったかも知れません。

宗祖親鸞聖人は人生を「難度海」(渡りがたい海)を航
海するようなものだと表現されています。人生を荒波にた
とえたもので、翻弄されながらもようやく○○(還暦等)

にたどりつかれたこと自体、ほんとうに奇跡といえるのか
も知れません。長い航海を経験されてきて、いまようやく
ひとつの大きな止まり木、念仏の教えにたどり着いたとい
えましょう。

そしてこれから新たな歩みの一歩をふみ出されるにあた

表白 例④

本日ここに ○○○さんの○○(還暦等)のお祝いにあたり
今 ここにある「いのち」に思いをいたし 過去・現在・未
来を通して我々を照らし続けてくださっている阿弥陀さまの
おはたらきの深さに感謝いたします

一、この度のこのご縁は 初事はつことと思うべし

一、この度のこのご縁は 我一人われひとりの為と思うべし

一、この度のこのご縁は 今生最後こんじょうと思うべし

と真宗門徒が大切にしてきた聴聞の心得があります
年を重ねるたびに新鮮な気持ちを使い 自分自身を善しとし
て 悩みや苦しみをから目をそらし 明日は必ず来ると 毎日
を生きていますが 私の生きる時間は 限られています

そのような人間に 今の一瞬を大事に 誰も代わることで
きない私として 毎日を精一杯生きよ といつでもどこでも
誰に対しても阿弥陀さまは呼びかけられています

願わくは 阿弥陀さまからの呼びかけに向き合い 人として
生まれたことを受け止められる人生を歩まんことを

○○○○年○○月○○日

○○寺住職 釋○○ 敬って申し上げます